養蚕圖解全

一蚕のはじまりの事
一蚕種をさしかのこと
一種子を実ぶつけること
一蚕蚕法度の事
一桑樹を植え桑園造り方
一桑の樹を作り養うこと
一桑生育の時分のこと
一家内陽氣水減の事
一蚕屋と申すこと
一蚕氣と陽ぐし事
一蚕業こころがのこと
一蚕盛の時分森多と遠ざけ
一休むわく簡と拵ちもの
一蚕の病気并腐り病の事
一蚕の病ひて福者く減りの事

原田繊維文庫
文庫4
700

文庫4
700

養蚕圖解序

稲田大学図書館蔵書

我國神代より蚕ありて稚産靈日神蚕を
かみの子孫教ひしより世々繼て
雄畏帝の后ハ自ら蚕を飼給ひ昔
より婦女の子たる者ハ必ず蚕
を養ふ事を立たる事 明かなる事
めでたきあらんより此書を

東京繊維文庫
昭和三十年十月二十九日
第一商学部より移管

書ふ所を仮名まじりにて
なぬ〻元壽をかふ所を かきたる書
者と云ふ自ら見を試たるこなれは
一大系書史あれ共東洋つゝあるを
好て用て かき集し物あれ共蚕を
かふ折の用ハ 十ぶん出あ
養蚕圖解ハ 壽のいまさ 卵あるをより
多郷より 終りまて自らあれ共 試

たゝこの世書をあつめ世に出すは
物あるべくして世の中に婦女子をせて
みくにくあんるを冀ふ世書をひろめ
あまねくあきらかにあらはまと
思ふあまつふ御そのよをかきて系にて
あらとふ事なり

天野政徳誌

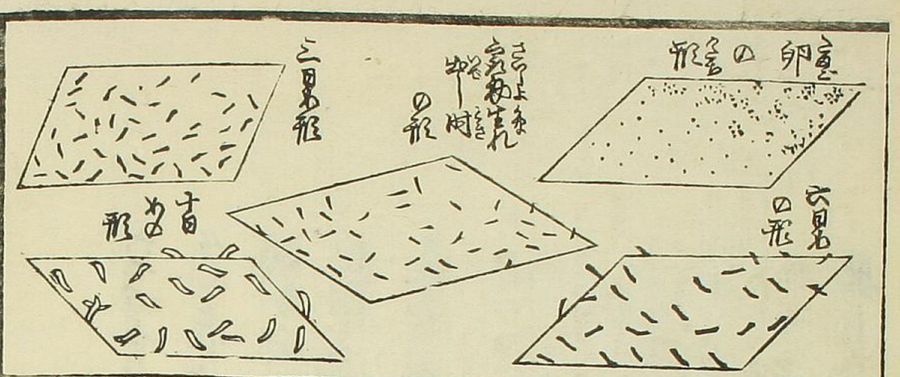
天照大神雅産霊日神奏聞
乃至教の御供食神八眉を作り
きりくて系にして色とする。
眉ふ生まるとかまふ者の眉ふ
似まべ彩色ふ者の作り系書
ふ生まれて綿孫乃も始めとなる又
雅日女尊齋服殿御ふ生まれて神の
御機をそどくせのみとりや。衣ふ
御神ふ織綿ふ生べて衣服の品
神と崇めなるまこと神の教え
を織殿へも不浄のうたを嫌ふ
なり。

天稚彦のうた

種子の体を拵よく面白くして生れ出ず。中の中少し二ツ三ツ種の地合能きあり。城の例
と種子のもと能き事はひなく方角ふ種蒔を紙に能方角しをよくよく種を
方ふ城を撰分る事専様をたくと名付て撰ぶ。惣まと中ゆと仕分る。能様の種は
言葉に。葉の様の種は小さと言ひ。色種の色あるを色種の種へ別る。葉に花の葉を
葉に種有る。又葉の葉の種出る。葉を例は種は葉の葉を
名付て種出る。葉落しわくら葉。種の色を分ける。能様の種は
別に刈葉の花葉を。例の方法を以て。葉を
ころ種拵。色々の葉名を城の性葉。別を葉
とも性能城は自然例の。と言葉を色々に名付
一ツの中に葉二ツ三ツ一ツ種。大きも色を色種
除て葉に葉。葉を例は種出るより。葉を
年よりの葉を冷を上に別の葉を。
多ねけあるとき葉のあそびあるふを。あるひは種のとあるさく

種子
見まる図

は其家より不吉あるなり。但度の新居は
拵別のき異事あるる。風雨の所前は
恐ること事あり。一ツ事も漏
りなく其種蒔を空ならば。体を種
元を分体して上種を水べし。
人人この所を知らば蒔の吉葉は年の
白り我運ありと知る人多し。と是
大概ひがごとなり蒔を蒔ならば生まるもの
は種子なり。別の事なれども皆我より
別るものあり。葉は泥柿の種を種て
其紀柿は生まるべし。又年の白り
より蒔を蒔ても其蒔の蒔を分る
人も多べからども。是は其年のまり



まづ蚕種をとりさへおけば卵をとりて別の上にたなびきまわり。乃ち種子へ紙貼をかけ入れ乳の器にかぶせ置き冷しさましへ別置へし。種子は性乳性乳は乳の器の底へ沈む。種子は性乳性乳は乳の器の底へ沈む。種子は毒乳性乳は乳の器の底へ沈む。

蚕種毒乳同洗法の事

種子は毒乳を洗へ紙貼をかけ入れ乳の器にかぶせ置き冷しさましへ別置へし。種子は性乳性乳は乳の器の底へ沈む。種子は毒乳性乳は乳の器の底へ沈む。種子は毒乳性乳は乳の器の底へ沈む。

種子を水に漬る事

種子を水に漬るの節毒乳をぬくことわるくまこと一流の性弱なり。卵の性弱きものは孵化せざる。性強きものは孵化せざる。

月の風の時痛むことなり。

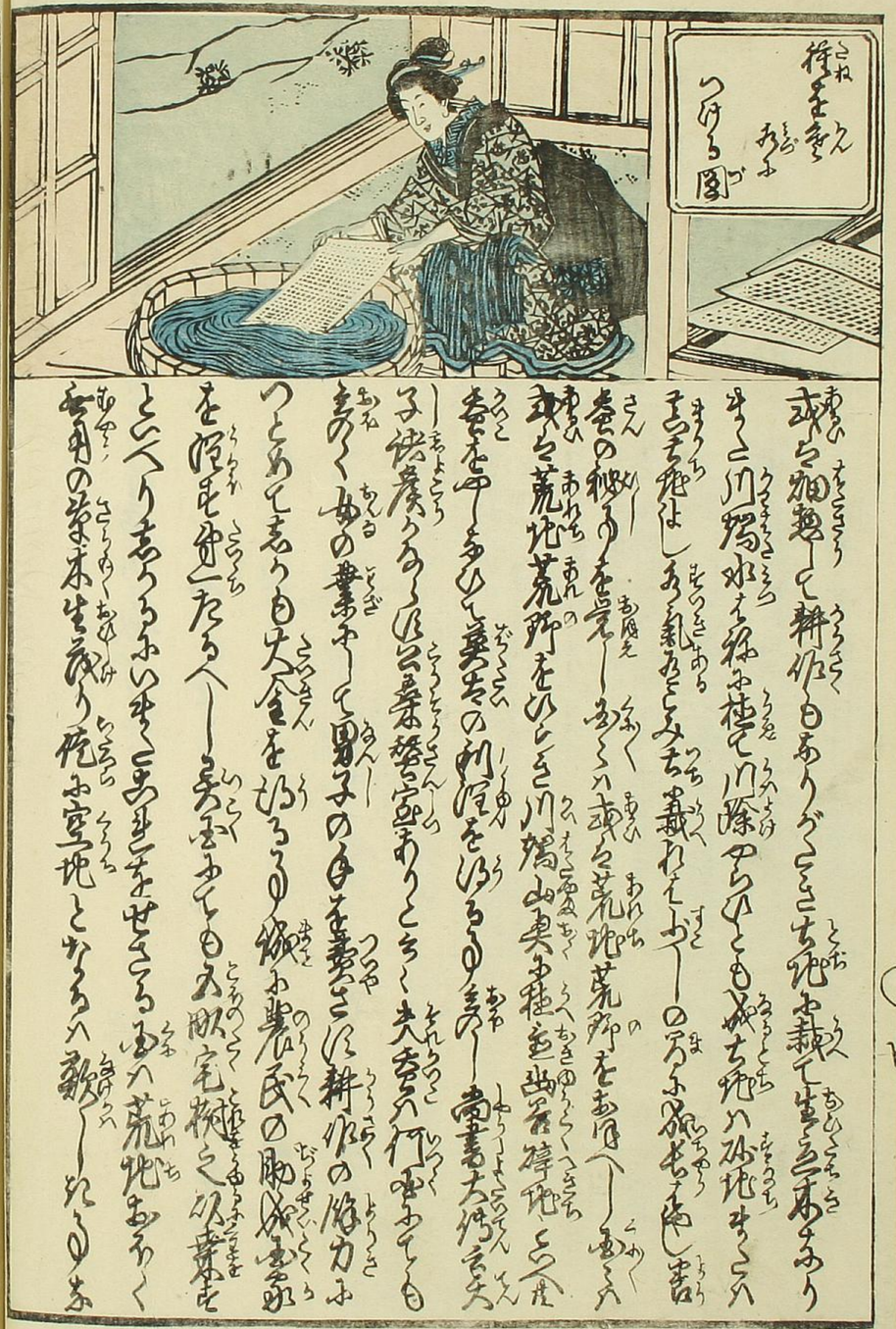
雨より降るる日あるいは水に漬ること大切なり。

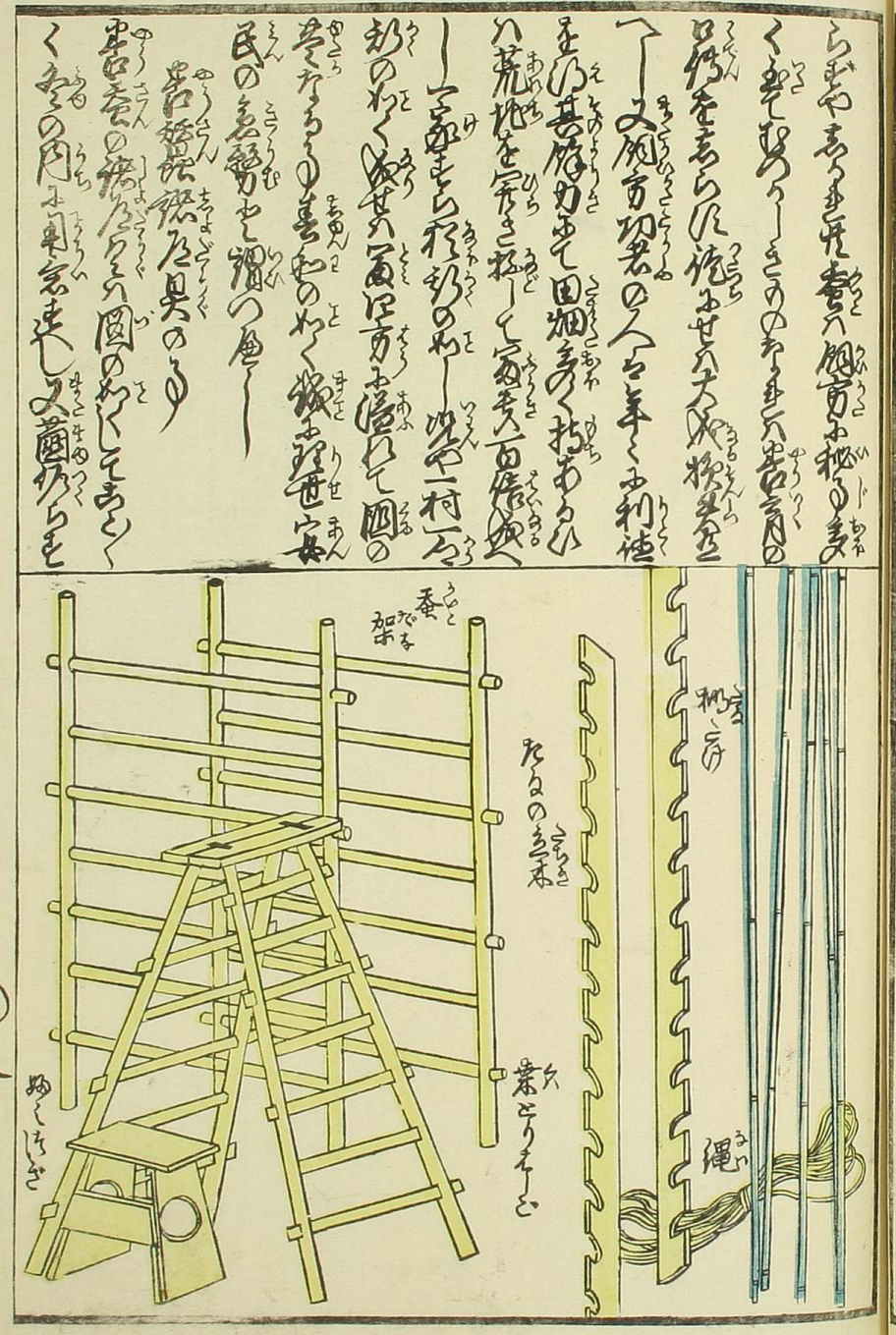
蚕種を乾す時は日和を見て竿にかけ干すべし。

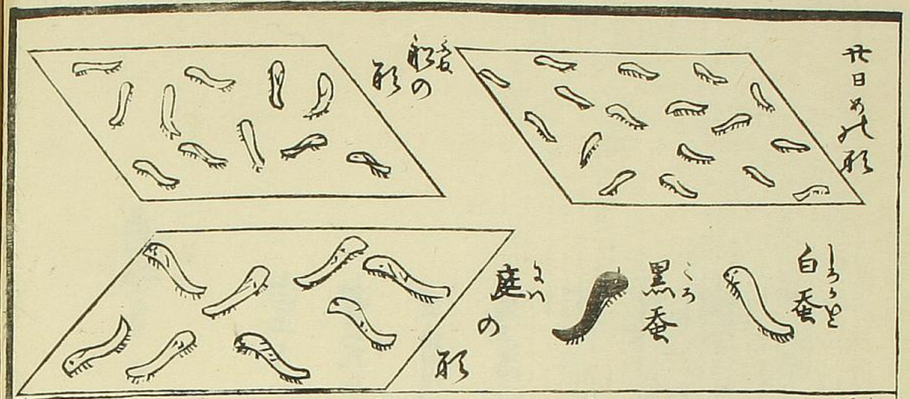
日陰にして晴天へ

蚕の樹を作り置くべし

世に桑二種あり桑八葉にして桑八葉の一種と桑の葉の作り形八角葉の上

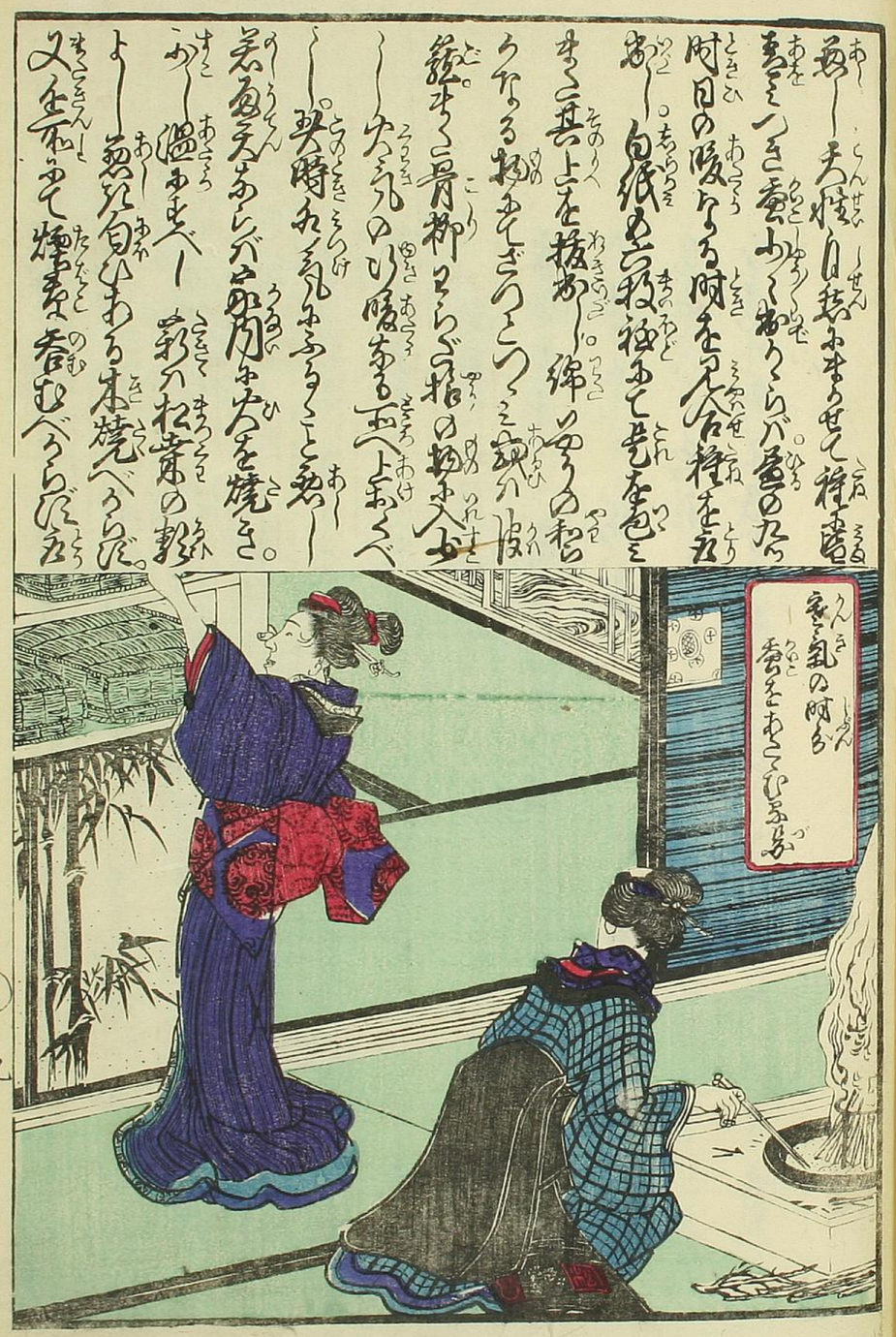

つける図


蚕架
たなの長木
桑とりそーど
ぬしたぎ
枕こだ
縄

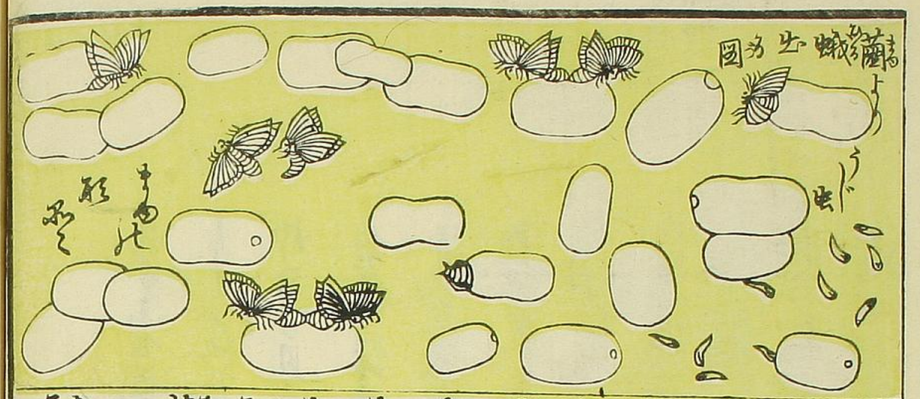


時分つゝ茶の湯の人茶碗にて茶を点ぜ
風流なるもの〜〜
蚕生れある時分の事

其年先あ〜〜おせんと称りの種を懐中に
乱の種らぬやうにして嵐のよりぬ高ぶるところ
へ紙を敷〜〜其の上へ蚕をつけて一日暮るゝと上へ〜〜と紙を二枚ら
きぐハ上へ〜〜ちりぐも温度の暖ひあつて種のよふなり
たちまハちやく生ずるやうに養蚕の形ふるり蚕
もつゝふさつと成る指の加減をへることと打惑ちり仕出の
あても八十八夜霜降後は蚕生れあるちり要時あるとて
日の照ちあふ或ハ陰中ふ入ちゝハ夜ハ蚕の蔵風ふつゝ或
ハ夫の生れふ紙を張ふ種を張ふ手足ふ蚕ふ

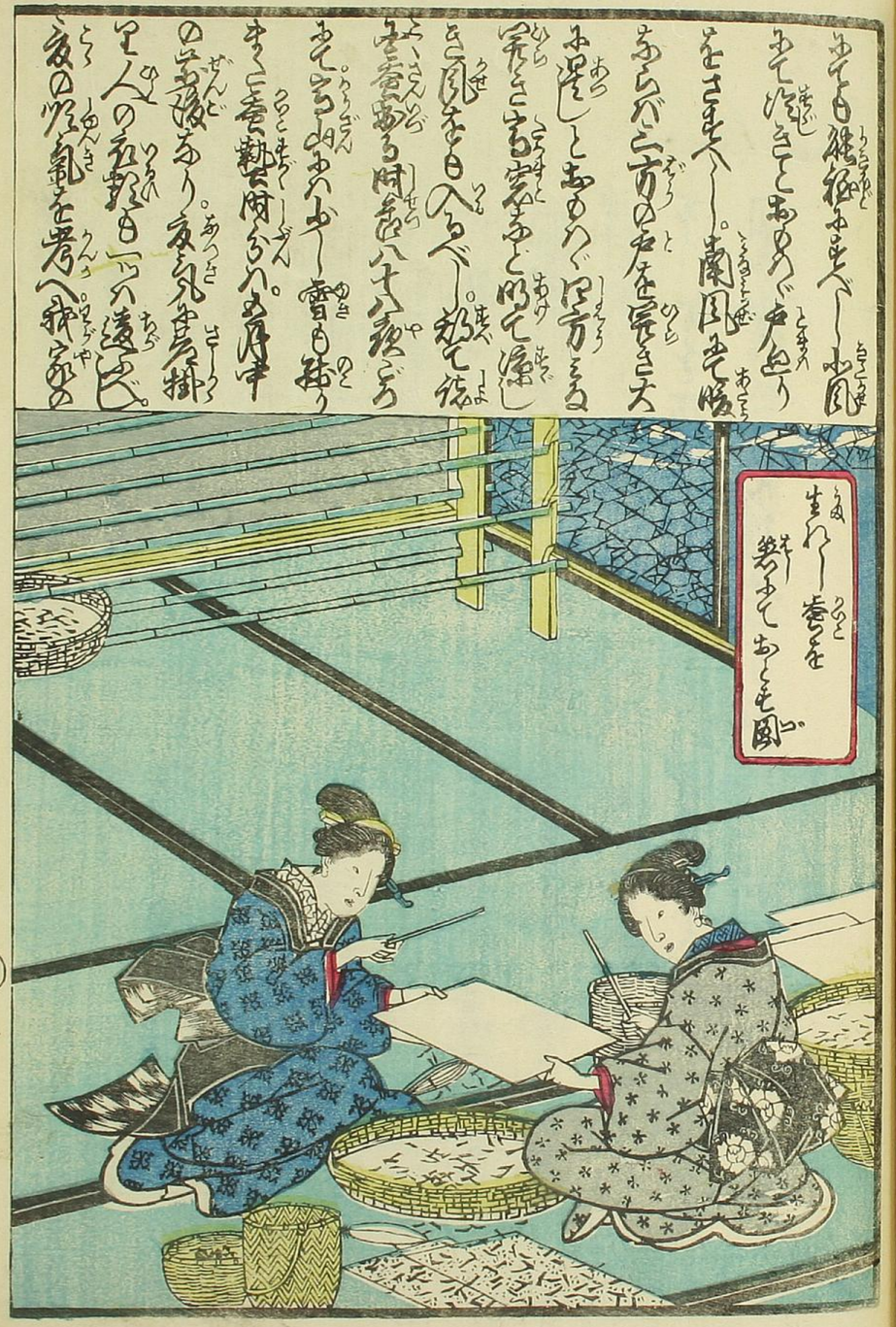


蚕〜〜天性白粉ふまぶせて種を
蚕ふ〜〜〜〜ちゝ蚕ふ〜〜〜〜ちゝハ蚕の九つ
時日の吸なる時を見合種を丸
ち〜〜白紙ふ敷ふて先を色ふ
ちゝ蚕上を振ち〜〜綿の如ちの和
ちなる物ふそゝつゝ成ハ吸
蚕ふちゝ青都ちらゝ指の物ふ入ふ
〜〜ちゝ九のり吸ふる蚕へ上ふくべ
〜〜夜時ハ〜〜ふふるゝ蚕〜〜
蚕ふ天ふしハ六月ふ六ふを焼き
ち〜〜温ふ〜〜〜〜彩ハ松葉の彩
よ〜〜蚕ハ旬ひわる木焼べらゝ
又生れふて煙草ふ香むべらゝ



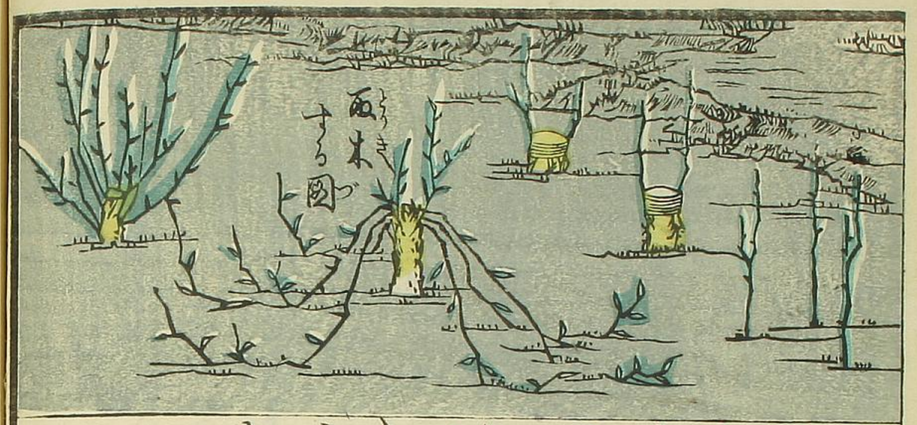
蘭より出る蛾の図

扨蚕を拂ふるも蚕毎ふまを洗清ふ也べし。
然る後蚕あるを新に掃除して蠶を養べし。
蚕拂ハ毒くさきを拂ふ也
蚕拂ハ毒くさきの仕法を其ものの物手宜敷ふ強ふべし
先蚕果家あれば彼風ふ大抵家をあけ戸の四家貝使ふ法べ
し。
風ねきの穴を塞て蚕のかゆをうん付く戸さしの蔵
生べきうゆをうん元より蚕ハ元ところを好む陰ところ入戸
をあけば蚕の居ふ陰くなる拂ふして蚕元より風ふ
生べし。別して初例ひの時拂の方ふて やしろうゆをうこと
あり。拂の濃りかひこふ陰り居らふ方ふ蚕るゆあり
蛇拂のあふ也ふ蚕べし
家門陽氣加減のゆ
蚕あるハ常ふ拂家の四氣を考へ拂家の時服拾ふ八ハ



蚕を養ふ図

蚕を拂ふ也べし。風
ふて洗きてあるゆ戸ふ
をさまへし。蘭風を嫌
ふ。ふらべ二方の戸を開き大
拂ふ。と拂ふ方ふ
開き方家ふと拂て濃し
き風を日入るべ。拂て後
ふ蚕あるゆ時ハ八十八夜ゆ
まそゆ拂ふ也。雪も降
ゆ蚕熟開ゆふ。拂中
の方後ふ。蚕風ふ
日人の五穀日ハ遠ふ。
蚕の少氣を考へ拂家



陽乳を能西瓜に浸し食べ。家の内の老婆を扶ろを陽乳をもたらしとの実なり。夕陽西瓜を戸を出さぬをもとの戸を出さぬをもとの戸を明るを出さぬをもとの戸を開ぬをもとの戸を閉ぬをもとの戸を閉ぬをもとの戸を閉

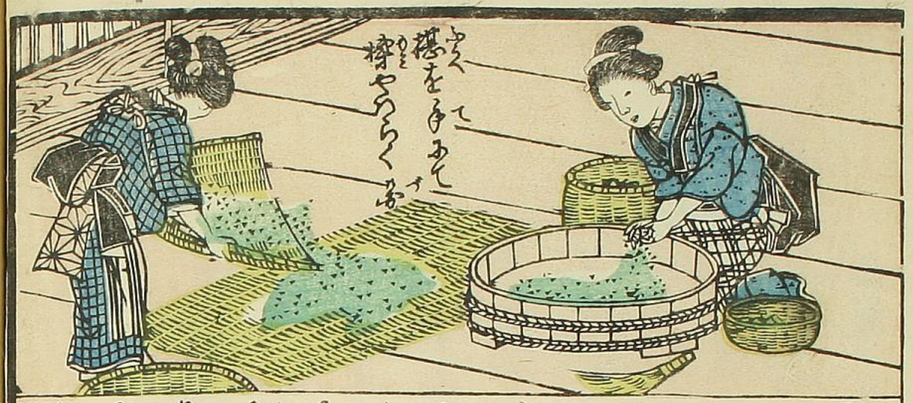
九月の
ざる
九月の
ざる
ほうき
ほうき
ほうき

蚕業八宜保源きりの事

ぢこれをからんとおもふ人ハよくくそかがんを
ぬぎ〜乳をうんぐく我身をぐーきあのくと
戸ハそこハ藻子あどあそこれをうこハ我身の毒
吸わうてその手毒をあそべー 毛先一ぬぐき
手毒の若毒ぬきて

蚕桑のうらぐ
ぎうのうら図

その逆逆きこあ東あ
ぎあもあこあるりそこ
蚕桑ぬもうるあれを
よくく桑をあらこそ
これをかべー上桑を
のこあて乳をうんぐく毛
をからが前ぬ一つもまづる
うあるべー夜天の間ハ
きくーきあのあれば桑を
あこあるぬうきまこ毛笠
ぬぎべきうぬ



を能おぼへて加減をするの打桑まり。

蠶の居紙を入のゆ

蠶の居紙は二日間あふ居風を好べし。葉摘

蠶の居紙をよくあらくきりて蠶を

尾丁押切の紙あて蠶ふ合せ中

目信の篩をもて蠶をふるい葉のあて水の乾候葉を去能篩ふ

して蠶をふりうけ給べし。夫天氣の居らふ

なるあ桑るるあり。其時いあらねとりぬうを蠶のうへふ

しー宛。ちらくとふりて蠶葉を給べし。居ちらうこと

て蠶葉を能給ふるり。此蠶の居紙は二日蠶葉の時紙蠶

上へ紙あて最のとく葉を振止こ。細を掃蠶を掃べし。細

ふ紙あり。和ゆ蠶葉志べ中ごちる。ふ至き居を蠶を蠶

ゆて捨ひ紙眠りし。蠶の高紙ところへ上やく紙ふ掃ふべし。

ちと掃ひ紙ー。蠶の居ら蠶葉をちべ。給せ紙蠶

小蠶は桑葉を食べし。稚は蠶の葉ハ紙掃ふを作て葉を給食べし。此時を休む葉ちつかちり。此休葉ハ蠶の居ふどふある湿ひ葉を乾し。其居ハ蠶葉給を止りて居る炭ふ色ゆく乾葉あ食べし。居ふ和葉の湿ひあを掃ち給食べし。居の休む葉る紙のごくちるくし。

奇体と風湿葉をちつたけて蠶ふむらなく

蠶とらふる図

蚕簿

或年蚕紅の時分霖雨を浸くらう

ふ涼風まげ〳〵。然る蚕大ふつくらしてあり。其間あるを

ふ吉蚕功者の人ありて。家内こぞ紙大を焼蚕のみきころ

能紙ふ湯気をめぐらし。ふ蚕百化して害ひろるふ

湿ふ痕を。を村主蚕の上伏せり落ふ出を笠の人

ろるうん〳〵ろるとうや。

同暑氣を防ぎ〳〵柳のう

ある日蚕庭ふ。孫の和暑気つよく南風ふて

さ〳〵ふ。ふ〳〵蚕大ふ病をしるゆ。或和の老人ふて

ろさ人あるふ。ふ星を掃別るゆ死ことふ白ふ手〳〵と思案を

めぐらし。大戸ふ庭蚕を出〳〵和ようふ人向て風を入

〳〵ふ。ふ人の蚕ふ〳〵も暑ふ〳〵ふ。上伏せ〳〵とあり。

氣ふ〳〵庭ふ〳〵ふ暑氣

氣ふ〳〵。ふ日ふ

ふ〳〵庭蚕を暑を涼

〳〵柳をあるひ蚕て大

間扇七八本掃へ手〳〵を

ゆて。毎日家内蚕棚の

間をあるぎ〳〵ふ〳〵。

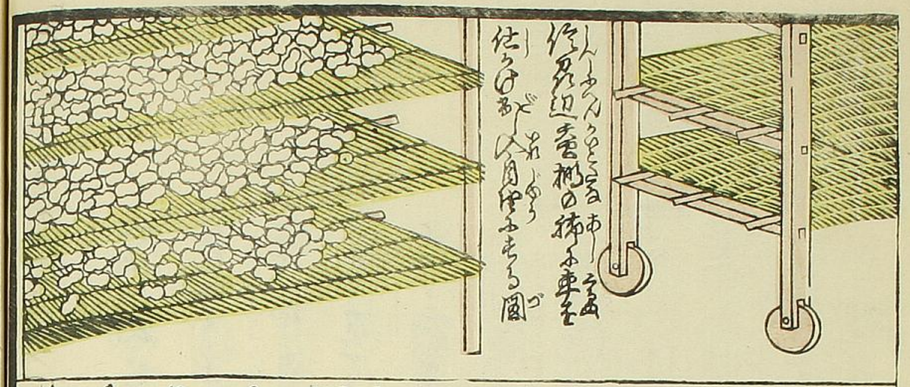
蚕ふ〳〵病ふ家ふ

ろう。ふ人志能人ふ通

ろ人ふ白〳〵ふ仕

蚕を教へるふ。何れもよ

ふ〳〵とあり。



仕立辺香物の棚を乗せ仕立ての図

いろいろ仕立てをする。

蘭を作らんとおもふ人は

秋香物ならば水月の頃のこくすきさるを指よなり。蘭を作らん

と菓屋なる者を尋ねたる稼おむ。是をあたへおきこと

中ふまたへ大きくこくつくり。秋風くまでもつくらば結ぶ

ふ。先荒場を拵へ遠の縄を幾寸程ずつ

中ふかく竹を南遠ひを結ひ付て。是こたへてつくりて図のか

くこと南ふ切。是をむーしろの中ふまきあらべ竹をまきぶ

香をたらくこと配りへ。ちくさみたる吸ふ所へ上蓋

と蘭をつくらば。是をあびらこと云ふと同仕こもの。

扨後丹波仕る者ふ。蘭の株を図のごとくたる。是

を棚の間ふあらべ蓋ひろふ者を入あのまこと仕ふのがふ也

当仕らば。又新ふ蘭をたらくこと吸ふ

所へ上あらべ蓋を作らんとおもふ。

新ふ蘭をたる。是より二月ふ

新ふ蘭をたる。蘭を引分

風を入蘭をたる也。

又紙ふ図のごとく二階の

書ふごとく。縄を二筋

つくり。縄ふ新ふ紙

竹の書を毎。香の棚

を図のごとくつくり。蓋

香物を棚の書を

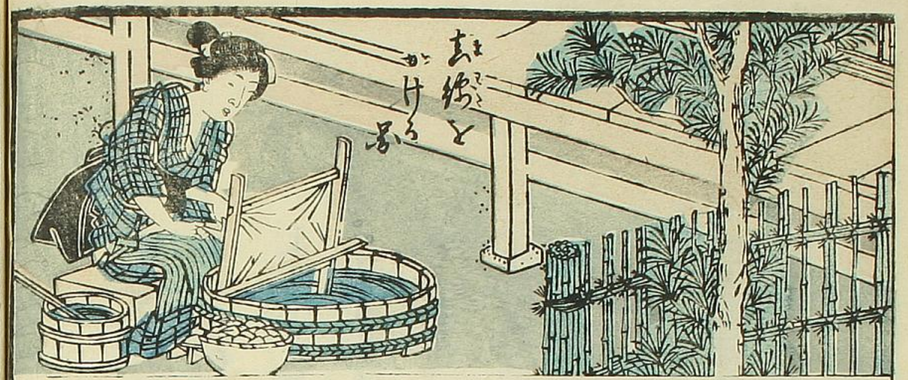
棚ふ上へ上へ。肩

ふ吸ふ。是を猫

棚ふ書をーき。

図のわく、ちまき、菖蒲を入れ。瓶に柳の万へ、菖蒲の
ゆらをあり。
又、関おろの八幡、宮八幡、長谷寺、鶴ヶ岡、
藤ヶ谷、遠藤、九郎、義経、弁慶、静もの義、
るゝ、法師の枝を入れ。菖蒲を例。ちまき、粽、
信夫山、忍ぶ草、くの流、俤あり。俤、色、
其、ちまき、ゆ、俤て、宮、ちまきを見べし。ちまき、
昔、ちまき、物語り。あり。あり、庸、
五月へ入る。ちまき、ちまき、五月、菖蒲、ゆらる
紙、ちまき、ちまき、ちまき、菖の屋、ゆらを
ちまき、なる、俤、ちまき、入べし。物語、
ちまき、ちまき、ちまき、風、
ちまき、ちまき、七八日、ちまき、日、ゆ、
つけ、中の、踊、ちまき、ちまき、ちまき、ちまべ
く、屋、ちまを、ちまき、ちまき、ちまき、ちまき、ちまき、ちまべ

一、物語、和歌の掛詞より、
千年百年して、御菖蒲、
ひきまゆり、選て、多人の暴、
あり、ちまき、今、ちまのつくり、
水の泡と消、美、の、
ちまき、ちまき、ちまき、ちまき、
つ、ちまき、ちまき、ちまの本、
のぶり、ちまの。人の、
ちまき、ちまのぶり、やゞて、
人、とする、ちまを、今、
ゆ、ちまり、ちまき、ちまき。過ち
ちまき、ちまき、ちまの、ちまの、
人、ちまり、ちまき、ちまも、ちまき



ふるゝ〜ゝくて干さあり。
奥方辺の絞女の方へ
方へ図のとく。竈をわり
鍋の湯煮こぼるゝと
を丹を記る度鍋ゝ鍋へ
入加減よく煮こる時煮
をもつてうきをぜ。ゆをを
さゝ〜〜ゝ〜ゝ斗傳
ゝ毛能ゝど拭毛ゝ
あり鍋の縁ゝ馬の尾或
女の髪の毛をゝさ情ゝし
て。毛を結ひ付ゝ穴ゝを
毛一図のとく。作の蓑ゝ

老付るふり。老つくへ女のまゆ毛を横ふちゝ圓のわく。右の手にて手前のろくへうちゝ白毛糸口細くふる女ことふかゝし。完成ならるる時ゝ糸ちゝ。よりそごりべ糸口ぬぎ老ふ加減ゝ

又一方ふ養蚕の右の方へ車ゝ老ふつゝき糸をうけてすく。ゝき付る。法五圓ふあらゝを糸五結法流義糸。空糸をゝ巻べし。

又糸をあげる繰車。これハ玉ふよりてゝ結法あゝゝへ。ども。まづ一方を圓ふ形へをまこゝ糸をゝねゝ結拵整ゝ。の巻りあわを其ふまこびよゝ。ゝをゝ巻べし。

蚕の若蚕。若ふ病元拵のゝ

蚕掃立。七八日ゝ掃子のふり葉ふ紙を上ゝ敷べし。

同二日目ふ掃子の葉ふ紙を敷ゝ

同日目ふ掃子の蚕ふ

なるをゝ上ゝ。

掃子の休ふ平ふ四角ふ

あつゝ。ゝ。ゝ蚕あわゝ蚕の

居場ふ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝ。ゝ蚕ハ吸ゝ蚕

ゝ。

掃子の居所ゝ。ゝ

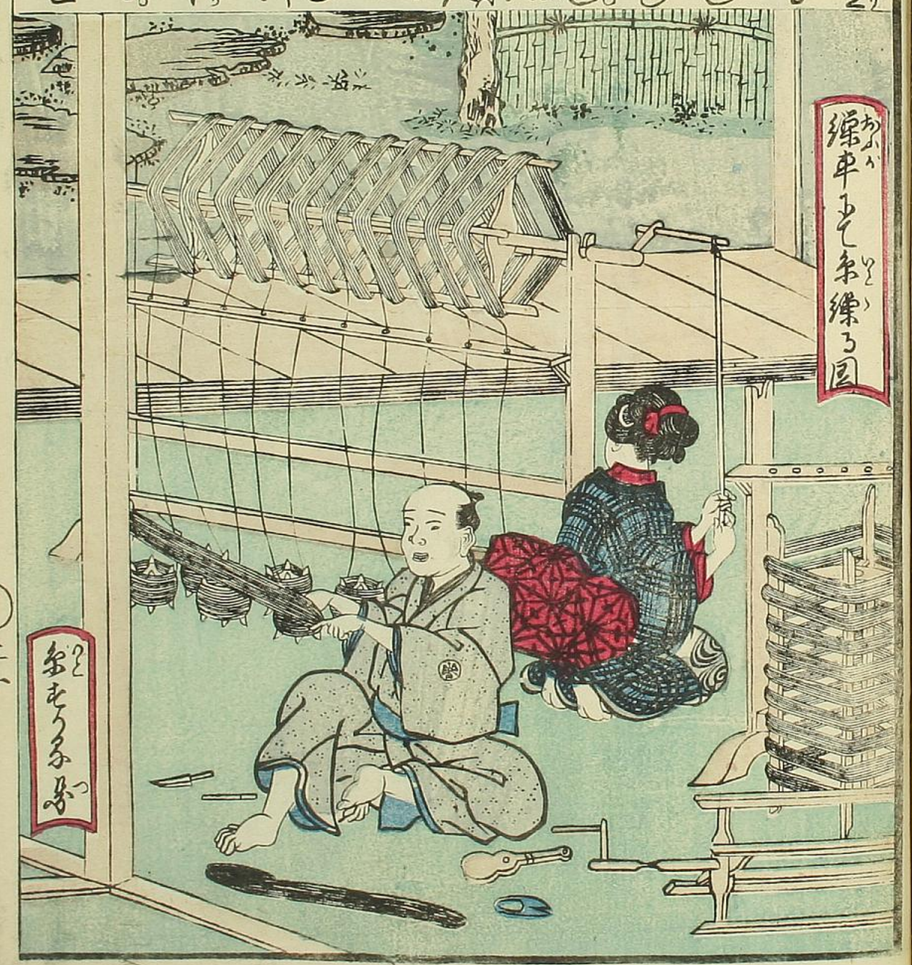
蚕あゝハ。ゝハ湯ゝ。ゝ

ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

ゝ。ゝ蚕ゝ。

蠶の居所紙の眠り紙を敷細く蚕をのべ蚕の葉を食べ
あくべ。蚕例ら本くこれ稚のと蚕をこと有るべ。蚕を例
ちゝげたる蚕を蚕のくあらば是を乳をあくしとあるべ
又居ちらばと云蚕を見も和をよりて五くの是をあり。是は
くんうの蚕屋の手入あゝくゆくこれは注意
をあくしし蚕を蚕のくあ来るあり。蚕を居所をかび第をと
る蚕を蚕のくあくあるべ。蚕の蚕の居りを蚕のく
出るゝ丸是ゆゝ。いくこと病乳の中紙丸を
風を是温を南りゝ蚕をりと云蚕の乳性と云蚕
雷を去きり病来らば。蚕ざ石をさしべ。蚕のこわを
大毒あり。是よりゝ五くの病と紙屋和を蚕の乳紙を去き
ゆなり。蚕管をるゝ蚕をまざる八初例の付脇あ去きゝ蚕ら。
蚕は焼大の中乳を南りしとあるべ。蚕を紙り言

時家をぬぎ例ざる蚕ろ
是は蚕の拔八蚕まるる
ら。或は木の紙をもまし
りれて蚕の蚕を南りし
病より病あゝとあるべ。
紙是を例を乳紙
ゝるゝひをゝ。蚕
あるゝは例拔ゝ。
是は生蚕の温を南りし
とあるべ。温塗をあく
ゝを焼もよろゝ。
蚕の病を蚕ゝとゝ。
蚕を初例より手入蚕き



うまくこの稽元あるさまをよくるべし。あふ程元をたゞす事し陸奥稽古を本色有
り。橋のあるさまをよくしるべきなり。此の巻ハ稽古の巻ハ和べし。

養の徒をて稽古となりしるし

上ハ貴雅氷彩の人初めて文をまなびれ。毎ふ仕へて巻めん元より家業をしれを朝夕
の焼日をうつ。書子ども例をふ昔ゆ一日を送りなるゞ。彩て八母を書ふを保もつた
ひ業をつくあらんとつらく考へ大利をもんる。養業をたくのあ。ゆこと其術を
見へ丹をも毒稽ふ書さ世ゆやこ思ハ。畑の田畑ふ業を枢要ふたより。を風方をゆ
稽ゆ工夫をこらし。さゆ。やて風をるふめ。ゆ。田畑を
知ひこゞく実。迎ふ流れあき家家とあり丹をも色やたく書せゆ孫ゆ
般ゆ品あて居るとあん見巻ひの徒を天ゆ感意ゆ。

養稽古圖解終

書林

京都寺町通松原上　菊屋七郎兵衛
大坂北久太郎町心斎橋北　河内屋喜兵衛
同心斎橋通博多町　河内屋茂兵衛
江戸日本橋通一町目　須原屋茂兵衛
同所四町目　須原屋佐助
同浅草茅町二町目　須原屋伊八
同芝神明前　岡田屋嘉七
同横山町三丁目　和泉屋金右衛門
同日本橋通二町目　小林新兵衛
同所　山城屋佐兵衛
同馬喰町二丁目　菊屋幸三郎　板

早稲田大学図書館
011488480130